

Course number		U-LAS70 10001 SJ50			
Course title (and course title in English)	ILASセミナー：歴史論争における解釈の妥当性を求めて アーヴィング対ペンギンブックス・リップシュタット事件を参照しながら		Instructor's name, job title, and department of affiliation	Institute for Liberal Arts and Sciences Associate Professor,TAKEZAWA HIROYUKI	
	ILAS Seminar :Searching for Adequate Narratives and Interpretations in Historical Controversies				
Group	Seminars in Liberal Arts and Sciences		Number of credits	2	Number of weekly time blocks 1
Class style	seminar (Face-to-face course)	Year/semesters	2024・First semester		Quota (Freshman) 10 (8)
Target year	Mainly 1st year students	Eligible students	For all majors		Days and periods Mon.5
Classroom	Seminar room 22, ILAS Bldg.			Language of instruction	Japanese
Keyword	歴史の歪曲 / 歴史解釈 / 歴史論争 / 思想戦 / アウシュビッツ強制収容所				
[Overview and purpose of the course]					
テーマ：歴史の事実認定と多様な解釈のあわせ					
<p>この授業では、歴史的な論争がどのように起きるのかのメカニズムを理解しながら、「妥当な」歴史解釈を行うためにはどのような資料操作や工夫、そして配慮が必要なのかについて考えたいと思います。</p> <p>現代社会において、過去の出来事に関する論争がいくつもあります。例えば、南京大虐殺とよばれる事件をめぐる、あるいは、アウシュビッツの強制収容所での蛮行についての激しい議論が思い浮かぶでしょう。これらの問題は基本的には、過去をどのように理解するのかという問いですが、それは同時に、しばしば現在の政治論争にも深く関連づけられて「思想戦」と呼ばれたりするなど、純然たる過去の解釈に徹することが難しい側面があります。</p> <p>また他方では、「こうも言える」「ああも言える」など、歴史解釈そのものを自由な表現活動のひとつとして捉えて、「何を言ってもよい」とか「どのような解釈も同等の価値がある」というような相対的な見方を私たちは受け入れている側面もあります。この考え方に則って極論するならば、「正しい歴史解釈」は人間の「正義」の数だけ存在することにもなってしまい、前記のような悲惨な出来事における、特に被害を受けた側に立つ人々やそれに関わる人々は、歴史の歪曲として、やるせない思いや怒りを抱くことにつながります。</p> <p>歴史解釈の唯一性や、反対に歴史解釈の相対性（多様性）という両極端な立場をとともに避けるために私たちが目指すべき姿勢を端的に表現するならば、「正しい」歴史解釈というよりはむしろ、「妥当な」歴史解釈への志向ではないでしょうか。前者には永遠不変の解釈というものが存在するようなニュアンスがあり、立場の相違による解釈の相違や、新しい資料や事実の発見による歴史像の改訂についての積極的な考察を試みることを躊躇させる側面があります。それに対して、「妥当な」歴史解釈は、共通了解としての一定の歴史解釈の存在を示唆すると同時に、必要な歴史解釈の変更・修正を考察の対象に据える側面を持ちます。</p> <p>では、「妥当な」歴史解釈とはどのようなものであり、それを引き出すために必要な心構え・姿勢（資料や対立する異なる解釈への向き合い方）とはどのようなものでしょうか。この問題について、多くの人々が一定の知識を持っているアウシュビッツ強制収容所の実態について、その法的な判断を含んだ貴重な裁判（<u>アーヴィング対ペンギンブックス・リップシュタット事件</u>、<u>1996年提訴</u>、</p>					

Continue to ILAS Seminar：歴史論争における解釈の妥当性を求めて アーヴィング対ペンギンブックス・リップシュタット事件を参照しながら (4)

2001年判決確定)に関する書籍を読解しながら、様々な論点について考えたいと思います。

こういった主題を論じる場合は、ややもすると一定の解釈を共有している考え方一色になってしまうことがあります。しかしながら、異なる立場や異なる歴史解釈にしっかりと耳を傾け、真摯な議論を行えるのであれば、どのような見解を持っている人でも大歓迎です。

以上のような目論見のもと、少人数の親密な空間で、楽しく、そして知的刺激にあふれた議論を行えるような工夫を担当者としてはしたいと思っていますし、参加する皆さんにも同じような配慮と努力をお願いできれば幸いです。

また精読が一区切りした時には、授業のテーマにかかわる映画やドキュメンタリーを視聴し、議論を深めたいと思います。

わたしたちは歴史にどのように向き合えばよいのか、そしてどのように解釈することが求められているのかなどについて様々な形で関心のある皆さんの積極的な参加を楽しみにしています。

[Course objectives]

この授業では、受講生がこれからの大学生活(やその後の社会生活)で必要な以下の基礎的能力を養うことを目的としています。

1. 【文献読解能力】人文社会科学の基礎的文献を読みこなす能力を身に着けること。
2. 【対話能力】他者の異論との接点を探りながら議論を進められるようになること。
3. 【説明能力】自分自身の意見や解釈を明快に提示できる能力と技術を身に着けること。
4. 【調査能力】ゼミでの主題に関して関連事項を的確に調査できるようになること。

[Course schedule and contents]

授業の状況によっては、内容を変更するが、概略として以下のように進めます。

第一回：イントロダクションと参加者による自己紹介など

第二から六回：テキストに関する議論

第七回：関連するDVDの視聴とそれに関する議論

第八から十二回：テキストに関する議論

第十三回：関連するDVDの視聴とそれに関する議論

第十四回：残された論点に関する議論

第十五回：フィードバック

[Course requirements]

1. WORDなどのワープロ・ソフトを利用して文書が作成できること(もしくは努力中)。
2. ネット環境を利用して検索などができること(もしくは努力中)。

[Evaluation methods and policy]

ゼミナールへの10回以上の出席(この基準を満たさないと、レポートを提出しても単位認定されません。)

討論への積極的参加と、議論の要点と論点をまとめたレジュメの担当(50%)

期末レポート(50%)

なお、とについては、到達目標の達成度に基づき評価します。またレポートの形式や課題に関するより詳しい情報は、授業において明示します。

[Textbooks]

デボラ・リップシュタット 『否定と肯定』（ハーパーコリンズ、2017年）ISBN:9784596550750

[References, etc.]

（References, etc.）

授業の中で議論の展開に応じて文献を例示しますが、近年の文献で大変有益なものを一点だけ挙げておきます。

小野寺拓也・田野大輔 『検証 ナチスは『良いこと』もしたのか？』岩波ブックレット、2023年、ISBN: 9784002710808。

[Study outside of class (preparation and review)]

授業は文献の精読と議論が柱ですので、日常から、文献読解能力と対話能力とを鍛えるように心がけてください。

また毎回の授業で用いる素材（書籍の特定部分）については十分に咀嚼して、論点を事前に考えてきてほしいと思います。そして報告を分担する回には、当該書籍のまとめと論点やコメントなどを明確に記載したレジュメを作成してきてください。

[Other information (office hours, etc.)]

「暗記しては吐き出す」ような受験型の勉強から、「思考力を鍛える」ような学習スタイルへの移行が順調になされると、あるいは、「ひとりでがんばる」だけの孤独な勉強ではなく、「まず一人で考えてみて、その結果について他者と議論をしながら、また考える」という共同作業を含む思考様式を身につけると、みなさんの大学生活が、豊かに楽しくなるのではないのでしょうか。このきっかけが、本ゼミナールでの学習や人間関係によって得られることを願っています。所属学部の枠にとらわれずに、積極的に学ぶ気持ちを持つ新入生の参加を期待しています。

また質問や相談は、大歓迎です。会議などで不在の場合が多いので、電子メール（Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）で事前に予約することをお勧めします。授業の質問、進学相談、また就学上の問題まで、なんでも遠慮なく相談に来てください。わたしで対応できない問題は、該当する大学内の機関や担当者を紹介します。